

第一級危険生物・兵藤一誠 リメイク

鬼塚虎吉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔、投稿していた作品のリメイク版です。

もし、一誠がゼブラポジションだったらという話です。

その短編を読んでいたらまた創作意欲が出てきたので書いてみました。

自分勝手ですみません。

目次

プロローグ	1
穴に吸い込まれて・一龍の思い出	4

プロローグ

ここは世界最大のグルメ刑務所の一つである「ハニープリズン」、このグルメ刑務所に収監されている囚人は全員が終身刑以上の罪を犯している犯罪者である。

その刑務所の中にある一つの処刑場では26種の生物を絶滅させた一人の少年が死刑囚として収容され、本人の意向で常に処刑を受けている。

その風貌はあまりにも少年とはかけ離れている、野性的で狂暴な顔つきに加えて顔中には無数の細かい傷があり、身体中にも大きな傷から小さな傷まである。

その上、刑を実行するにあたって少年の四肢には極太で長大な鎖で繋がった手錠がつけられている。

そんな少年の元に老人と中年の男の二人組がやって来る。

少年はジャラジャラと音を鳴らしながら体を起こして、その二人の男に向かってこう言ってくる。

「ようやくオレをココから出す気になったのかよ、ジジイ。」

その言葉に老人が口を開く。

「まったく、お前は相変わらずじやのう、イツセー。」

ため息交じりの言葉にイツセーと呼ばれた少年はこう言ってくる。

「うるせえぞ、サツサとここから出しやがれ!!」

大声でそう言っているイツセーに対して中年の男が口を開く。

「おいおい、そんな態度じゃここから出す訳にはいかねえぞ。」

「あ、あ、!?!」

中年の男の言葉にギロリと睨みながらイツセーは中年の男の方を向く。

「与作 teme、どの面さげてオレの前に現れやがった!!」

大声でそう言っているイツセーに対して与作と呼ばれる男はこう言ってくる。

「そう吠えるなよ、まず一龍会長の話を聞け。」

与作の言葉に舌打ちをしつつも一龍会長と呼ばれた老人の方に顔

を向けると、真剣な顔をした一龍がいた。

「実はのう、ここ最近で時空の穴の様な物が発見されたんじや。しかし、その穴の出現した場所が問題なんじやよ。」

「どこなんだよ、その場所ってのは。」

「うむ、その場所はノマルー島という場所なんじや。」

質問するイツセーに一龍は質問に答える。

「ノマルー島だど？あんな平凡な島ならIGOの奴等も入れるだろうが。」

「それがのう、その穴が現れた時から強力な猛獣が住み始めてな、IGO職員も近付けなくなっておるんじや。」

それを聞いたイツセーがそう言うのと、一龍は情報を追加する。

「集まってきた猛獣達の平均捕獲レベルは60。じゃから、職員も派遣することができんのじやよ。」

「だから、オレに行かせようって事か。」

「まあ、そんな感じじやのう。」

イツセーの言葉に一龍は顎を触りながらそう言った。

「オレじゃなくてもトリコやココ、サニーの奴がいるだろうが。」

そう言って来るイツセーに対して一龍はこう言っ来て来る。

「あいつらは今、グルメ界に行くために様々な環境に細胞を適応させるために修行の最中じや。」

一龍の言葉にイツセーは顔をしかめる。

「グルメ界だど？」

「そうじや、お前にも修行をして貰うぞ。」

「めんどくせえな。」

グルメ界という単語に対して反応するイツセーに一龍がそう言うのと、イツセーはそう言うのだった。

すると、猛獣の雄叫びが処刑場に響き渡る。

イツセーのいる処刑場の処刑方法は四肢に繋がれた鎖の先には四匹の猛獣に繋がっており、その四匹が同時に引き合えば四肢が引き千切られてしまう。

その四匹の獄卒獣が動き出し、鎖はピンツと伸び切ったがイツセーの四肢が千切れる事はなかった。

何故なら、猛獣の引く力を腕や足の一本だけで釣り合っている。

「テメエ等とじゃれ合うのもこれが最後か・・・、あばよ。」

そう言った瞬間、息を一気に吸い込んで技を放つ。

《サウンドバズーカ》!!

イツセーの放った技が猛獣を泡を吹かせながら失神させ、自身を繋いでいた鎖や手錠を破壊し、その処刑場を崩壊状態にしてしまう。

「全く、ここまで破壊しおって・・・。」

一龍は頭を押さえながらそう言うが、イツセーは気にも留めていない顔をしている。

「それで依頼の詳しいこと教えろ。」

「おっ、やってくれるか？」

「せっかく出所の機会を得たんだ、みすみす逃す訳ねえだろ。」

一龍の言葉に悪態をつくイツセー。

「その依頼一つだけのために出所させる訳ねえだろ、他にもお前にはやって貰いたい事があるんだよ。」

その言葉に対して与作がそう言うて来るが、イツセーはサラツと無視して一龍に話しかける。

「それでジジイ、その島を調べればいいんだよな。」

「そうじゃ、それに100種類の新種食材の発見、500人の指名手配犯の捕獲が出所の条件じゃ。加えて修行食材の捕獲もしてもらおうぞい。」

「チツ、分かったよ。」

一龍の言葉に舌打ちしながらも同意するイツセーだった。

穴に吸い込まれて・一龍の思い出

ハニープリズンを出た後、オレはすぐに依頼であるノマルー島に現れたという時空の穴の調査に向かった。

ノマルー島に着くと、そこには確かに情報通り捕獲レベルが高い猛獣達に住みかとなっていた。

「ほう、中々愉しめそうな場所になってやがるじゃねえか。」

オレはそう言いながら島に上陸すると、現れたのは捕獲レベル65の猛獣・デーヴィルバイソン。

「モ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「お前、チョーシに乗ってやがるな。」

鳴き声を上げて突進をしてくるデーヴィルバイソンに対してオレは息を吸い、技を放つ。

《ボイスカッター》

この技を放った瞬間、デーヴィルバイソンの体が四つの肉の塊と化した。

「確かコイツの肉は美味かったよな。」

倒したデーヴィルバイソンを食い終えると、早速時空の穴と呼ばれる場所にへとやってきた。

オレはその穴に近づき、その中を覗き込むと地球のような物が確認出来る。

「なんだあ、コイツは一体どうなってやがんだ?」

オレがそう言っていると、穴の方に変化が生じた。

それは猛烈な吸引力で辺りの物を吸い込んでいく、オレの事を含めて。

「クソツ、いきなり何だってんだ!?!」

その吸引力は踏ん張りを利かせていても引つ張られてしまう。

ついにはオレが耐え切れぬほどの吸引力を発動させ、穴の中にへと入ってしまう。

「クソツタレがああああああつ!!」

オレはそう叫びながら穴の中にへと吸い込まれ、意識を失ってしま

うのだった。

一龍SIDE

「全く、イツセーの奴め」

ワシはそう言ってオゾン草の茶葉で淹れた茶を啜りながら赤ん坊のイツセーを見つけた時の事を思い出していた。

イツセーを見つけたのは捕獲レベルが高い猛獣がわんさかいる場所でポツンといた。

ワシが抱き上げると、イツセーの中にはグルメ細胞の悪魔とそれとは全く別の存在がいる事に気づいた。

その存在は八王に匹敵もしくは、凌駕する存在である事を感じ取ったワシは何故この子がこんな危険地帯で生き残っているのかを察した。

そして、イツセーのいた場所の奥の方には時空の穴の様なものがあり、ワシはそこに向かったが間に合わず穴は完全に塞がってしまった。

それを見たワシはイツセーの事を育てる事に決めたのだった。

イツセーを育て始めて十五年が過ぎた頃、その頃にはトリコ・ココ・サニーも居ったのう。

イツセーの奴は血の気が多いからよくトリコやサニーとは喧嘩をしておったな。

今回の時空の穴が現れたと聞いたワシはイツセーを元の世界に戻そうと思った。

じゃが、言って素直に聞く奴ではないからのう。

じゃから、依頼という名目で時空の穴が現れたノマルー島にへと送り込んだ。

「行ってこい、息子よ。」

そう言いながらも一度ワシは茶を啜るのだった。